ヨハネの黙示録 Kotodama

小泉友美 KOIZUMI T

目次

ヨハネの黙示録 Kotodama 短歌を通して 1

目次

ヨハネの黙示録 Kotodama 短歌を通して

黙示 (ギリシア語でアポカリュプシス) とは隠れたものを表に出す、啓示 Revelation という意味がある。「ヨハネの黙示録」とは新約聖書の最後の聖典で、ドミティアヌス帝時代の紀元 96 年頃に編集されたという説が有力であり、預言的性格を持ち、キリスト教終末論と、レカビトゥラティオ (最統合、反復)、終わりは始まりのようであるという定式化したパターン構成が特徴的な書である。
12 章の構成からなり、さまざまな象徴的なイメージが現れる。
黙示録はまた、古代キリスト教の小アジアにおける 7 つの主要な教会に宛てられる書簡であり、この 7 つの教会とは、エフェソス、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアである。
用語解説をしながら、短歌でこのヨハネの黙示録の世界を表現してゆきたい。

(聖書　新共同訳　日本聖書協会　使用)

黙示録のシンボルを読み解く簡単な説明

子羊　キリスト教精神史において、子羊とはキリストを象徴する言葉である。過越の祭りの子羊のように、イエス　キリストは犠牲になったという復活祭の象徴である。

獣　地上の獣は地上の権力の象徴であり、黙示録においての獣の角は、ドミティアヌス　ローマ皇帝 (81 年から 96 年までのローマ皇帝) までの歴代のローマ皇帝とキリスト教徒殉教をあらわしている。

竜　傲慢かつ闘争心が強く、戦争と混沌とした力の性質を持った怪物として、カミによって最後には圧倒される。

鳥　一般的に言って、鳥には両義的な役割があり、純粋かつ不純でありながら、善悪を象徴する動物で、例えば鷹は力 (黙示録 12, 4) でありながら、「また、見ていると、一羽の鷲が空高く飛びながら、大声でこう言うのが聞こえた。不幸だ、不幸だ、不幸だ。地上に住む者たち。なお三人の天使が吹こうとしているラッパの響きゆえに。」

騎士　黙示録 6 章のなかでは、赤い馬は戦争、黒い馬は飢饉。黙示録 19 章では、白い騎士はキリストの象徴。

娼婦　黙示録では、娼婦という言葉は政治と商業の栄えたバビロニアとローマの都に結びつけ、政治的デカダンスそのものに同一視されている。

黙示録においての色の象徴は、実に微妙な色合いを楽しむものであり、白色は純潔、名誉と勝利。黒色は、喪と死。馬に乗る騎士の黒服 (黙示録 6,5) と黒い太陽 (黙示録 6,12) 紅色は血、炎と力であり、かつ戦争と暴力。黄金色は、富と王権の色である (例えば、黄金の華や王冠)。

ヨハネの黙示録　短歌アレンジ
序文と挨拶 (1 章 1- 8)

黙示なる
カミの言 (ことば) の
証し (あかし) かな
預言の言葉
時が迫りて

預言なる
言葉を聞いて
時近く

今いまし
昔いまして
来たる方
イエスの恵み
平和ありけり

キリストの
血より解れし
わが罪か
王と祭司の
ちからみなぎり

父ありて
神　民　祭司
あれかしと
雲のかなたに
仰ぎ見るなり

A とΩ

はじめとおわり
カミなりし

天上におられるキリストの姿 (1 章 9 -20)

カミの言
御霊に鳴りし
主の日か

衣着て
七つの星に
剣出て
つよく輝く
太陽かな

はじめなり
終わりの者よ
限りなく
世々限りなく
生と陰府なり

見たことを
今あることを
書き留めよ
秘められし意味
七つの数に

右の手に
七つの星よ
集え数えて

エフェソにある教会にあてた手紙 (2 章 1-7)

嘘の使徒
愛から離れ
悔いながら
いのちの木の実
カミの楽園

スミルナにある教会にあてた手紙 (2 章 8-11)

悪魔あり
誘惑うけて
牢入りて
死に至るまで
忠実なり

耳あれば
霊あり告げる
勝利よ
第二の死から
害を受けずに

ベルガモンにある教会にあてた手紙　(2 章 12- 17)

改めて
口の剣で
戦えば
勝利を得た
新しい名に

ティアティラにある教会にあてた手紙 (2 章 18-29)

燃える目の
カミの子申す
行いと
愛信仰と
奉仕 忍耐

権威あり
鉄の杖もち
治めれば
土の器を
打ち砕かそう

サルディスにある教会にあてた手紙 (3 章 1-6)

七の霊
七つの星に
生きている
目を覚ましては

死にゆくものよ

カミの前
完全なもの
受け　聞き　思いは
守り抜けて
悔い改めよ

目が覚めず
盗人のよう
分からない

白衣 (しろころも)
まといて　歩む
共　あゆめ
命の書よ
消すことはなし

父のまえ
天使のまえで
公 (おおやけ) に
耳あるものは
告げ聞くがよし

フィラデルフィアにある教会にあてた手紙 (3 章 7 - 13)

聖なる
ダビデの鍵で
開け閉めて
さらに閉じても
あけることなし

門開き
言葉守りて
名を知らず
サタンの集い
忍耐をしる

足元に
ひれ伏し　愛を

知らせよう
試練のときに
きみを守ろう

栄冠を
奪われないで
守りぬく
勝利を得て
カミの柱へ

外へ出て
カミの名　都
天からくだり
エルサレムの名
新しき名を

ラオディキアにある教会にあてた手紙 (3,14-22)

誠実に
創造されし
万物の
源 (みなもと) である
方が言われし

行いは
冷たくもなく
熱くなし
ただ生ぬるく
吐きだすままに

金持ちは
満ち足りつつも
惨めさや
哀れ　貧しく
こころの恥を

火で燃やせ
精錬された
金を得て
裸の恥を

さらさぬように

天上の礼拝 (4 章 1-11)

開かれた
門　天ありき
音　響く
霊に満たされ
天の玉座

上りきて
後　起こること
示そうと
霊に満たされ
天の玉座

玉座に
虹　輝いて
碧玉や
赤メノウなり
24

白衣
冠いだき
長老おり
さまざまな音
雷　おちて

七つなる
ともし火燃えし
カミの霊
玉座まえの
ガラスの海よ

獅子　雄牛
人　鷲　集い
目と翼
昼夜絶えず
聖 (ひじり) なるかな

聖なる
聖なるかな
聖なる
全能者の
カミあるじ

玉座に
世々限りなく
生きている
栄光ほまれ
たたえて　感謝

主よ　カミ
栄光　誉れ
力　受け
万物造る
御心ありて

子羊こそ巻物を開くにふさわしい (5 章 1-14)

右の手に
巻物ありし
表　裏
封印解いて
巻物開く

天地にも
巻物開き
泣きわめき
泣きおさめては
封印ひらく

葬られし
子羊立ちて
七つある
角　目　霊あり
遣わされては

竪琴と

香いる鉢に
祈るなり
新しき歌
この地を統す

天使あり
数千万の
声響き
ほうむる羊
力　富　知恵を

力　富
知恵　威力の
誉れあり
栄光　賛美
ふさわしい方

天地　海
あらゆるものよ
申しでる
世々限りなく
ありますように

六つの封印が開かれる (6 章 1-17)

子羊の
七つ　封印
出て来いと
見よ　白い馬
勝利をえる

弓を持ち
冠うけて
さらに勝つ
封印開き
白馬あらわれ

火のような
赤馬　駆けて
自由なし

平和を奪い
殺しあうまま

第三の
封印開き
黒き馬
乗りし者の手
天秤揺れる

子羊が
四の封印
開きとき
青白い馬
乗り死　陰府従 (よ) い

飢饉と死
人を滅ぼす
権威あり

カミの言
証しのために
殺された
人々の魂
祭壇の下に

裁きせず
地に住む者に
ふりかかる
血の復讐されるがままに

各一人
白い衣が
与えられ
殺されてゆく
仲間の僕

第六の
封印開き
大地震
太陽は暗く

星は落ちゆく

天は消え
山　島すべて
移されて
王　富める者
すべて隠れし

山と岩
覆いかさぶる
主 (あるじ) あり
羊の怒り
大いなる日に

刻印を押されたイスラエルの子ら (7 章 1- 8)

地の四隅
四人の天使
立たずんで
吹く風押さえ
大地 海にも

生けるカミ
刻印持ちて
太陽は
昇り上がりて
損なうべからず

大地　海
木も損なわわず
刻印を
押されるままに
人々の数

白い衣を来た大群衆 (7 章 9-17)

見よあまた
国民　言葉
集まりて
白衣まといし

手になつめやし

救いある
カミと羊よ
玉座に座り
賛美　栄光
誉れ　威力

苦難あり
衣を洗う
羊の血
昼夜仕え
幕屋を張って

飢え　渇き
暑さ襲いて
牧者となり
命の泉
涙なかれし

牧者よ
命の泉へ
導きて
目から涙を
ぬぐわれるまま

第七の封印が開かれる (8 章 1-5)

第七の
封印開き
沈黙に
包まれしまま
御前に立つ

天使あり
香炉を持ちて
祭壇の
祈りに添えて
金の祭壇

香けむり
天使の手より
火をみたし
地上へ投げ
稲妻走る

天使のラッパと災い (8 章 6-13)

ラッパ吹き
ひょう火生まれ
地が焼けて
地上も木々
青草すべて

山が燃え
海に投げ入れ
血に変わり
生き物は死に
船も壊され

燃える星
天から落ちて
その名前
苦もよぎなり
にがき苦きて

太陽は
三分の一
月星も
光うしない
夜とおなじく

一羽なる
鷲　空高く
飛びながら
不幸あるべく
声　高だかと

星　落ちて

底なしの淵
穴開く
鍵　与えられ
底無しの淵

かまどから
けむり上りて
陽も空も
いなごの群れよ
地上へ出ず

地に潜む
さそりの力
苦しめる
死を望んでも
死は逃げてゆく

戦あり
冠　戴く
底なしの
淵の使いは
いなご王

第一の
災い　過ぎて
更なるは
二つめの厄
また訪れる

第六の
天使が吹きし
角笛よ
カミの御前の
金の祭壇

つながれし
四人の天使
放されて
人の大半
殺す使命

その年と
その月その日
その時間
時　整えて
いまがあるかな

騎の数は
幻のなかの
原色
火　煙　硫黄
三の災い

災い
遭い　殺されず
残る人
悔い改めず
偶像拝す

偶像は
見る　聞く　歩く
こともなく
殺めまじない
悔い改めず

天使が小さな巻物を渡す (10 章 1-11)

雲まとい
天降りて
虹いだき
頭　顔　足
駆けぬける

おのおのの
雷　語る
秘めごとに
書き留めせずに
海と地に立つ

右手上げ
世々限りなく
生きている
天地海なか
創造されし

時はなし
ラッパ吹くとき
秘められし
計画成りて
良き知らせあり

さぁ　行って
海地の上に
立っている
開かれし巻物
受けとり食べよ

さぁ行って
海地の上に
立たずんで
腹には苦く
口には甘し

巻物を
天使から受けとり
口甘く
腹には苦し
声が聞こえし

二人の証人 (11 章 1-14)

物差しで
神殿測り
数えれば
放られるまま
異邦人たち

二本ある

オリーブの木と
燭台に
火よ放ちて
敵を滅ぼす

一匹の
獣　淵から上りきて
戦えば
二人を殺め
証しを終える

三日半
命の息が
カミ出でて
二人に入り
恐れるこころ

天へ上り
大地震あり
人　倒れ
恐れ抱きて
カミをたたえて

第七の天使がラッパを吹く (11 章 15-19)

さまざまな
大声ありて
この国は
世々限りなく
統治されゆく

今　おそれ
おられた方よ
カミあるじ
力　ふるいて
統治されゆく

異邦人
怒り狂いて

主　いかり
死者裁いて
時が来たりし

僕あり
預言する者
聖者の
御名畏れても
滅びゆく時

天にある
カミの神殿
開かれて
契約の箱
さまざまな音

女と竜 (12 章 1-18)

おんなあり
太陽まとい
月　踏みて
十二の星
冠いだき

身ごもりし
子を産む痛み
叫ぶまま
しるし現れ
真っ赤な竜

竜あり
子を産むおんな
見張られて
子を喰らおうと
待ち伏せるなり

天にあり
戦い起きて
ミカエルよ

竜に挑み
おとされる悪

カミありて
救いと支配
現れし
メシアの権威
現れるまま

もろもろの
天にすむ者
喜べよ
不幸を避けて
時を尊 (とう) とべ

竜あり
地上へ落ち
女あり
二つの翼
荒野におちて

蛇　逃れ
一年二年
時　たちて
へび水吐いて
女　流れて

二匹の獣 (13 章 1- 18)

一匹の
獣　海から
上り来て
カミをあざける
名が記されし

熊の足
獅子の口ある
獣あり
玉座と権威

拝まれるまま

大言と
冒瀆 (ぼうとく) の言
吐くままに
活動ゆるす
権威あるまま

まがつもの
うち勝つままに
権威持ち
偶像拝む
者を従え

耳ありし
者よ聞け
剣あり
捕らわれてゆき
殺されてゆく

子羊の
角をはやした
獣あり
権力持ち
火を降らせゆく

刻印は
666
獣の名
自由なくして
属するままに

十四万四千人の歌 (14-1-5)

子羊が
シオンの山に
立たずめば
十四万
四千人

その額
子羊の名と
父の名が
記されるまま
音　とどろいて

竪琴が
新しい歌
弾きならし
身を汚されず
贖 (あがな) われつつ

三人の天使の言葉 (１４章 6-13)

天使飛び
あらゆる民に
告げ知らせ
永遠の福音
大声で告げ

カミ畏れ
栄光たたえ
裁きあり
天地海水
源　創る

倒された
大バビロンが
倒された
怒りを招く
酒をのませて

獣あり
その像拝み
額　手に
刻印受けて
怒る盃 (さかずき)

怒りある

葡萄酒飲み
火と硫黄
世々限りなく
苦しめられて

書き記せ
主に結ばれて
死ぬ人よ
幸い　然り
報われてゆく

鎌が地に投げ入れられる (14 章 14-20)

見ていると
見よ　白い雲
人の子よ
冠かぶり
鎌を手に持ち

刈り入れの
時　来るままに
実るまま
鎌投げ入れて
地上にあり

鎌持ちて
葡萄の房よ
熟れるまま
しぼられるまま
鮮血ながれ

最後の七つの災い (15 章 1-8)

極まりし
カミの怒りよ
火が降りて
ガラスの海は
竪琴を聴く

カミの道
正しく畏れ
讃えれば
聖なる方に
ひれ伏すままに

天にある
証しの幕屋
開かれて
世々限りなし
立ち昇る香

カミの怒りを盛った七つの鉢 (16 章 1-20)

七つある
鉢に盛られし
怒りかな
腫れ物できる
刻印おされ

血がたまり
生きものすべて
死にゆけば
しずまりかえる
海の源

今おられ
正しき方の
裁きあり
血が流されて
悔い改めし

獣あり
闇　おおわれて
悶えつつ
ひと　舌をかみ
カミ　冒瀆し

ユフテラス

川の水枯れ
口開き
偽預言者
汚れし言葉

盗人よ
裸で歩き
恥をかき
ハルマゲドンに
汚れし　霊よ

事成りて
さまざまな音
起こりきて
雷　地震
都　裂かれて

大粒の
ひょう降りきて
害を受け
冒瀆行為
甚だしくも

大淫婦が裁かれる (17 章 1-18)

大淫婦
みだらな汚れ
裁かれて
地上の王
酔いによわされ

荒野にて
赤き獣と
女あり
冒瀆の名は
頭と角に

緋色なり
忌まわしきもの

汚れもち
大バビロンよ
母の嘆きか

今はなき
ついには滅び
底なしに
命の書に
名は記されず

憎まれし
淫婦の衣
はぎ取りし
その肉喰らい
火で焼きつくす

バビロンの滅亡 (18 章 1-24)

バビロンは
倒れに倒れ
汚れゆく
霊の巣窟
不幸よ　不幸

バビロンが
焼かれる煙
限りなく
世々立ち昇る
血の復讐

子羊の婚宴 (19 章 5- 10)

喜んで
大いに喜び
栄光よ
婚礼の日の
花嫁ありて

白馬の騎手 (19 章 11-21)

天開き
白馬駆けて
裁くまま
また　戦われて
目は燃えさかる

血に染まる
衣をまとい
王の王
鋭い剣
口より出でし

千年間の支配 (20 章 1-6)

底なしの
淵に鍵あり
鎖　垂れ
魔界の天使
縛られるまま

年を経た
竜　押さえて
鍵をかけ
千年かけて
封印をなす

サタンの敗北　(7 章 1-15)

千年の
統治おわりて
サタンあり
焼きつくされて
火　硫黄の池

最後の裁き (20 章 11-15)

天も地も
御前から逃げ
行方しらず
死者を裁く
命の書か

海ありて
死と　陰府　死者
火の池に
投げこまれゆき
裁かれるまま

新しい天と新しい地 (21 章 1-8)

新しい
天地は去りて
海消えて
聖なる都
着飾るままに

カミ人と
共に住みゆき
この世あり
涙ぬぐいて
もはや死はなく

書き記せ
信頼できし
言葉あり
事成りたちて
真実うまれ

初めあり
アルファオメガ
終わりきて
渇きし者に
命の泉

勝利を

得る者継ぎて
そのものの
カミとなりけり
我が愛し児よ

忌まわしき
ものたちありて
報いあり
火と硫黄燃え
第二の死かな

新しいエルサレム (21 章 9-27)

七つある
災い満ちた
鉢ありて
子羊の宴
霊に満ちゆき

エルサレム
輝くままの
宝石よ
透きとおるまま
都　築きて

命の水
流れるままに
命の木
実をみのらせて
病をいやせ

輝いた
命の水の
流れあり
両岸には
命の木あり

命あり
岸をわたりて

命の木
実をみのらせて
病　いやせよ

キリストの再臨 (22 章 6-21)

書ありて
預言のことば
守りし者は
幸いなりき

来てください
渇きし者よ
来てください
命の水と
命の木かな

来てください
イエスよ
来てください
主　イエスの恵みが
すべての者にありますように
アーメン！

2025 年　5 月 6 日
アンジェ　フランス　祈

ヨハネの黙示録 Kotodama

著　者　　小泉友美 Koizumi Tomomi

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社